

再論：四国遍路と作法の変遷 Changes in the Conventions of the Shikoku Pilgrimage: A Reconsideration

内 田 九州男
Uchida Kusuo

“Conventions of the Shikoku Pilgrimage” refers to the content of the sutras offered before the designated main temples and the halls dedicated to Kōbō Daishi. Taking hints from the texts of pilgrimage guidebooks, I will discuss this content, as well as changes and continuity in the conventions

The conventions of the Edo period are characterized by the syncretic fusion of Shinto and Buddhism. Along the pilgrimage route, prayers were offered not only to the main Buddhist images of temples and to Kōbō Daishi, but also to the various gods, great and small, of Japan, along with the chanting of Buddhist incantations and singing of songs related to the temples. At present, the conventions center on recitation of the *Hannya Shingyō* (Prajna-paramita Sutra). During the Meiji period, through policies of the new government, Shinto and Buddhism were separated and Buddhism weakened, creating a crisis for the Shikoku Pilgrimage. Until recently it was thought that, in response to these circumstances, temples clarified the religious nature of the pilgrimage by focusing on the *Hannya Shingyō*.

According to the recently discovered Shikoku Henro Goeika *Dōchūki* (The Shikoku Pilgrimage: Songs: A Travel Journal) of the early 19th century (late Edo period), however, the *Hannya Shingyō* was already being recited. There are both centrally and locally published versions, however, with the *Hannya Shingyō* not mentioned in the local version.

Entering the modern era, three general styles appear in introductions of Shikoku Pilgrimage conventions. The mainstream was formed by the traditional Edo-period style, in which the Buddhist nature of the convention is intensified with the addition of various sutras (but not the *Hannya Shingyō*). A second style, which stressed Buddhist ascetic practice, was seldom used. In the third, recitation of the *Hannya Shingyō* was added to the previous convention. The late-Edo-period Shikoku Henro Goeika *Dōchūki*, which was republished in 1880 (Meiji 13), exerted an influence on subsequent practice. The convention it describes appeared in the guidebooks of Yasuda Hiroaki and Nishihata Sakae and become firmly established following World War II

『四国遍路 作法とお経の意味』
（「百万人にお遍路を伝える会」霊山寺内）



はじめに

「四国遍路と作法の変遷」に関する私の最初の報告は二〇〇五年「四国遍路と作法の変遷」であった。ここで言う「作法」とは、遍路が札所の本堂や大師堂の前で行う納経の内容を指している。これを「仏前勤行」ともいう。この報告では、遍路の作法（「仏前勤行」）そのものは案内書の記述を手がかりにして、その内容とその変遷、継承を検討した。

この時、対象とした時期は江戸時代と明治時代。その特徴は江戸時代は神仏習合の時代で、遍路は札所本尊・弘法大師へ祈りを捧げると共に伊勢神宮を初め、我が国の大小の神々へも祈り、光明真言・大師宝号と札所の歌（ご詠歌）を唱え捧げた。明治十三年、同三十五年の案内書では仏前勤行は「般若心経」を中心とするお経でおこなわれるようになり、今日の仏前勤行の作法に近いものとなった。先の報告では、慶応四（一八六八）年神仏分離令、明治四（一八七二）年六十六部の禁止、明治五年托鉢行為の禁止、と続いた新政府の宗教政策の展開の中で、巡礼・四国遍路は危機を迎え、その中で宗教側が選り取ったのが、勤行に般若心経を中心にしたお経類を大幅に取り入れ、遍路の宗教性を明確にしていくという方向であったと考えられる、とした^②。

その後、江戸時代の新出の案内書、明治、大正、昭和期の案内書等を対象に追加の分析を行った結果、先の「四国遍路と作法の変遷」に事実関係を大幅に追加する必要が生じ、同時にその考察結果をも修正する必要が生じた。

そこで、本報告では、二〇〇五年の報告内容も活かしつつ、新たに内容を再構成し、あたらしい評価を加えることとした。

一 現代の作法

前回と同様まず現代の作法を確認することから始めよう。

今回も『四国遍路 作法とお経の意味』（「百万人に、お遍路を伝える会」霊山寺内）から現代のお参りの作法と手順を紹介することにする。

① 山門にて合掌し、一礼する。仏様が山門までお迎えに来て下さっている、感じます。帰るときも、見送って下さっています。

② 手洗いで、手を清める。

③ 本堂に参り、納め札、線香、ロウソク、供物料としてお賽銭を納める。念珠をすり、合掌してお経を唱える（↓「仏前勤行次第」）。線香は、お祈り中にお迎えしている仏様を香でもてなします。ロウソクは心に灯す智恵です。

④ 大師堂に行き本堂と同じ要領でお参りします。

⑤ 念珠の持ち方（省略）

⑥ お札を霊場に残し、心からの願いを託します（以下略）。

この手順の中にある「仏前勤行次第」は以下のように示されている。

① 開経偈（かいきようげ）

② 懺悔文（ざんげのもん）

③ 三帰（さんき）

④ 三竟（さんきよう）

⑤ 十善戒（じゅうぜんかい）

⑥ 発菩提心真言（ほつぼだいしんしんごん）

⑦ 三摩耶戒真言（さんまやかいしんごん）

⑧ 仏説摩訶般若波羅蜜多心経（般若心経）（ぶつせつまかはんにやはらみったしんぎよう）

⑨ 十三仏真言

⑩ 光明真言

⑪ 大師宝号

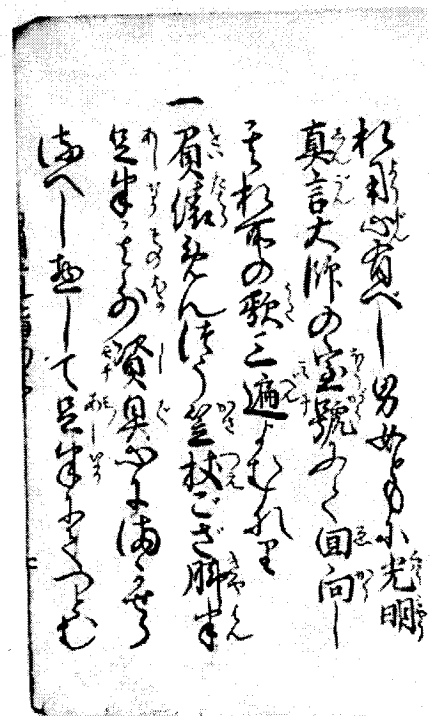
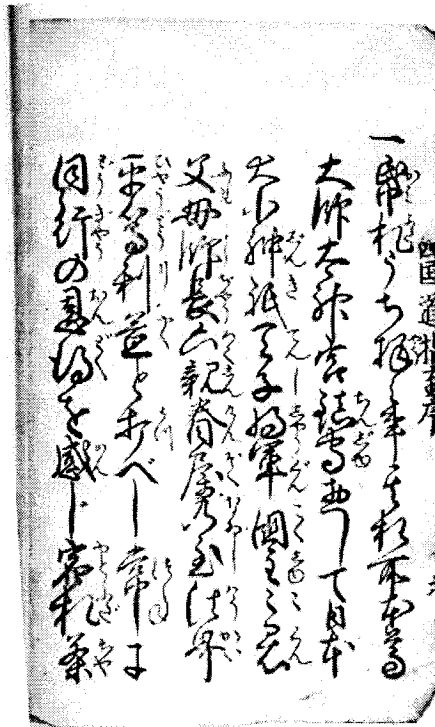
⑫ 回向（回向文）

それぞれの文言・内容は本文末尾参照のこと。

二 江戸時代の作法

（1）真念『四国辺路道指南』―貞享四（一六八七）年刊―

遍路の案内書として最も古い真念『四国辺路道指南』では仏前勤行は
どうなっているか。それをみておこう。同書の「紙札うち様之事」に仏
前勤行が手短にまとめられている。



（『四国霊場記集別冊』（勉誠社）より）

掲載の図版部分を翻字する。

「紙札うちやうの事」（「紙札うちやうの事」）

一 紙札うち様の事、其札所本尊・大師・大神宮・鎮守・惣して日本

大小神祇（①）

天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界平

等利益と打べし（②）

常に同行の恩得を感じ宿札茶札用心有べし（③）

男女ともに光明真言・大師の宝号にて回向し（④）

其札所の歌三遍よむり（⑤）

- ①⑤の番号を付しているのは、夫々その番号の順にまとまっていると判断できるからである。まずは①のまとまりから。①は、祈りの対象、ご利益を授けてくれるものを指している。まず第一に、札所の本尊と弘法大師に祈るがあげられているのは当然であろう。次いで大神宮、総体としての我が国の神々、仏と神に祈る、神仏習合となっている。二番目（②）は、祈りを捧げた仏神からご利益を授かるものがまとめられている。

天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界とある。このうち、師長は目上の人、六親・眷属は親族、法界は生きとし生けるもので、天子以下生きとし生けるものまでがご利益を受けるのである。第三(③)は同行者の恩義や宿・茶の接待に感謝する、同行者や支援者への感謝がまとめられている。第四(④)は、何によって回向するかの問題。回向とは、修行によって蓄積した善根や功德を自分のためにではなく、他人や人以外の生物の幸せを願って振り向けることを「回向」という(岩波仏教辞典^③)とあるので、他者の「救済」といえる。その方法は光明真言・大師宝号を唱えること。最後に札所への賛辞(⑤)は、ご詠歌を詠うこと、となる。

次にこの真念の案内書より八十年後の明和四(一七六七)年刊行の『四国偏礼道指南増補大成』^④(版元大坂柏原屋清右衛門)を見る。この案内書は同名で文化十二(一八一五)年^⑤、天保七(一八三六)年の刊のものを含むが、混乱を避けるために、明和四年刊のものを明和版、文化十二年刊のものを文化版、天保七年刊のものを天保版と略称する。版元は明和版が大坂の柏原屋清右衛門、文化版は大坂の佐々井治郎右衛門、天保版は江戸の須原屋茂兵衛他である。

ところで、この三冊では①文化版は、明和版とほとんど同版であるが、序の一部を刻りなおし(内容は同じ)、本文(札所紹介)では五番地蔵寺、十八番恩山寺の記述、そして奥付を改変している。②天保版も同じく明和版とほとんど同じである。序文では本屋の名前が出る二行と「但し」という文言を削除しているが、他は明和版と同じ。本文(札所紹介)はやはり五番地蔵寺、十八番恩山寺の記述を改変し、かつ奥付を改変している。このように文化版、天保版ともに地蔵寺と恩山寺の記述を改変していることがわかる。そこでこの改変部分を中心に3冊の比較表を作成した(表1)。

表1『四国偏礼道指南増補大成』比較表

箇所 (丁数と表裏)	明和版	文化版	天保版
4表	歌三遍よむなり 一負徳めんつう笠つえござ……	歌三遍よむなり 一負たわら 一笠つえ……	歌三遍よむなり 一負徳めんつう笠つえござ……
4表	此書物出所 大坂心齋橋筋順慶町柏原屋清右衛門 同町 同 与市 他	此書物出所 大坂心齋橋南五丁目佐々井治郎右衛門	(此書物出所云々を削除)この部分空白のまま
3表	熊野権現天照大神のやしろ有 阿州地蔵寺奥院 壹萬七千二百大 阿羅漢集所 尤も順ぎやくうちぬけ	熊野権現天照大神のやしろ有 阿州地蔵寺奥院 阿羅漢集所 尤も順ぎやくうちぬけ	(明和版と同文で)「熊野権現天照大神のやしろ有」まで (後2行を欠く)
9表	母養山恩山寺と号すとなん、つるまき坂の藪の下に大師 誕生のむつきを納し所也	母養山恩山寺と号すとなん、次二つるまき坂下釈迦座宝龜 五甲寅年六月十五日弘法大師誕生尊像をあんちし次に藪 の下むつきを納し所也	母養山恩山寺と号すとなん、つるまき坂の藪の下に大師 誕生のむつきを納し所也(明和版と同じ)
奥付	明和四丁亥正月再板 大坂心齋橋筋順慶町柏原…	弘所阿州十八番札所恩山寺ノ隣釈迦庵 文化十二亥十一月求板 大坂心齋橋南江五丁目 佐々井治郎右衛門版	右四国へんろ道するべ井二道案内の儀ハ中祖真念法師 の御作にて御座候ゆへ至て有がたき本にて候、然るに近 年所々に類本数多出来仕候、しかし元來偽書に候ゆへ道 法御詠歌或ハ御城下山坂峠などもれ候事多く御座候間板 元名所とくと御札しの上もとめ可被下奉願上候 天保七丙申年十二月再改正 書林 江戸 須原屋茂兵衛他

この比較表によると、板木を新しく買い求めた佐々井は、その文化版で明和版の恩山寺の記述に同寺の隣の釈迦庵を加え、その釈迦庵を奥付で自己の出版物の「弘所」として掲載したが、これを実施することに改訂の主要な狙いがあったようである。すさまじい商魂といえるであろう。そして天保版では、版木の所有者が変わったために恩山寺の記述が明和版にもどったのであろう。地蔵寺の奥の院の改変問題は羅漢の数に問題があったのか、詳細は不明である。ここの主題である、仏前勤行の部分「紙札打やうの事」に話題を戻すと、明和版、文化版、天保版の三冊とも、貞

享四（一六八七）年の真念『四国辺路道指南』と同じ作法を記しおり、天保七（一八三六）年まで全く変化しなかったことを示している。

念のため、その部分を明和版から引用しておく、

其札所の本尊・大師・大神宮・鎮守・惣して日本大小の神祇（①）
天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界平等
利益と打べし（②）

常に同行の恩得を感じ宿札茶札用心あるべし（③）

男女ともに光明真言・大師の宝号にて回向し（④）

其札所の歌三遍よむなり（⑤）

である。このように江戸時代の仏前勤行は真念以来、江戸時代後期の天保期まで変化しなかったのであった。なお、真念の『四国辺路道指南』の末尾にある「願以此功德 普及於一切 我等与衆生皆共成仏道」（回向文）も、『四国徧礼道指南増補大成』の末尾にも掲載されており、真念以来引き継がれているものであった。

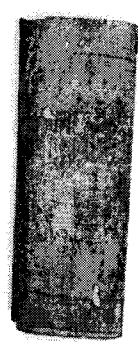
次にこうした仏前勤行の内容「納経は、般若心経でなく、ご詠歌で」というのと同じ基調をもつと思われる新資料があるので紹介しておきたい。それは、「□奉納四国中辺路之日記」と題する小さな粗末な木版の刷り物で、内容的には一種の案内記である。

その体裁は、冒頭に旅する僧侶の姿を載せ、その脇に「くうかいしこくへんろう」と記す。そして次の行に「□奉納四国中辺路之日記」と題している（□の部分は梵字が入る。）さらに次の行に「阿州式十三ヶ所」とあって以後阿波の札所二十三ヶ所の案内が続く。札所の記述は、上段に本尊の種類、本尊の姿、次への距離を載せ、下段に札所名、御詠歌を載せる。ただし札所の番号は載せていない。非常に単純な内容であるが、立派な案内記になっている。この国別の項目は、さらに「土州十六ヶ所」「与州廿六ヶ所」「讃州廿三ヶ所」とあって、合計八十八ヶ所

となっている。末尾に



「□奉納四国中辺路之日記」（部分）
（愛媛大学 日本史研究室蔵）



合計八十八ヶ所
道四百八十八里
川四百八十八川
坂四百八十八坂
空□（印）
元禄元年土州一ノ宮
長吉飛驒守藤原
ある。元禄元年は一六八八年である。この末尾の数字は、本資料より十三年前の澄禅の『四国徧路日記』に「世間流布ノ日記」（又は「辺路札所ノ日記」）の記載内容として引用されている数字と完全に一致する。従ってこの「□奉納四国中辺路之日記」は澄禅の日記にいう「世間流布ノ日記」の可能性もある。

三 「般若心経」の登場

文化十一（一八一四）年に『四国編路御詠歌道中記 全』^⑧（吉田家本）という案内記が刊行された。ここでは、この『四国編路御詠歌道中記 全』（吉田家本）を検討する。



『四国編路御詠歌道中記 全』（四国徧礼道案内(内題)）

本書の冒頭には、遍路の効能が記されている。

夫四国辺路一度巡拝の輩は病苦またハよろづの難を除き未来成仏うたがひなし、辺路に道をおしへ一夜の宿をかし一粒一錢を施すものは寿命長久にして諸願成就すべきものなり

（意訳）

そもそも四国遍路を一度回った者は、病気の苦しみあるいは様々な災難を避け、未来においては成仏疑いない。遍路に道を教え、一夜の宿を貸し、一粒一錢を施す者は長生きし、諸願が実現するものである。

当時の遍路の効能を手短くまとめた文で、遍路や遍路を支援する人々がどんな功德を得ると考えられていたかを示す好材料である。遍路を一回回った人は、病苦と災難から逃れ、死後は成仏することができる。人々は考えていたのであった。また遍路の支援には、道を教える、一夜の宿を貸す、一粒一錢を施す、こういった行為を考えていたようである。これに続いて、

「用意の事〇札はさみミ板（略）」

紙札打やうの事 其札所本尊・大師・太神宮・鎮守・惣じて日本大小の神祇（①） 天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界平等利益と打べし（②） 常に同行の恩得を感じ宿札茶札用心有へし 男女俱に光明真言・大師の宝号にて回向し（③） 其札所の歌三遍よむなり（④）

一負儀（略）

（絵三人の遍路の旅姿）

ここは、『四国徧礼道指南増補大成』明和版と同じである。

しかし、次が大きく異なる。

しよしんごん

ふどう　しゃか　もんじゅ　ふげん　ぢぞう　みろく　やくし　く
 わんおん　せいし　みだ　あしく　だいにち　たいにち　こくぞう
 まかはんにやはらミつたしんぎやう
 十句くはんおんぎやう

さんげもん（三へんとなふべし）
 （いずれも経文は略）

諸真言（実際は十三仏真言（ここでは「だいにち」が2回ある））、
 して摩訶般若波羅蜜多心經、十句觀音經、懺悔文である。

この後に

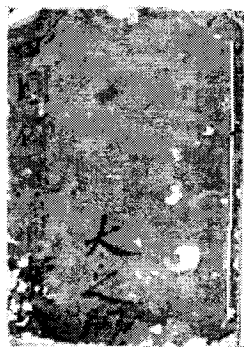
四国遍路道しるべ

阿州　むや舟附なる戸ヨリ一ばん迄三リ」とあつて以下札所の案内が続く。（一番く八八番の本尊・（姿）・札所名・次への距離・詠歌）

【奥付】となっている。

本書の特徴は「諸真言・般若心經・十句觀音經・懺悔文」を「仏前勤行」に組み込んでいる点である。

次に本書との関係で注目される案内書がある。それは玉川大学図書館所蔵の『四国偏礼道案内』である。その図版（①く⑤の順）を見て頂くと判明する。



①

『四国偏礼道案内』玉川大学図書館蔵



②



⑤



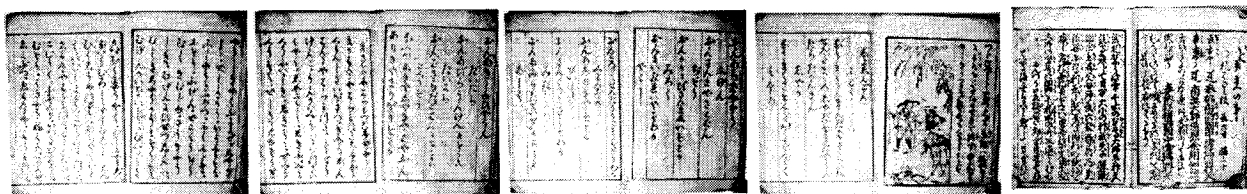
③



④

玉川大学図書館本は、『四国遍路御詠歌道中記 全』（吉田家本）と同じ版木を用いたと判断できる一本である。玉川大学図書館本では「〇札はさミ板」の説明の後ろの「紙札打ち」の続きに三人の遍路の旅姿の挿絵を入れ、そのあと、一番霊山寺から札所案内が始まる。

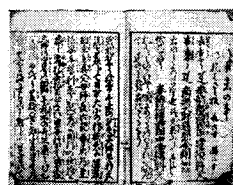
次に両本を比較するために、上段に吉田家本、下段に玉川大学図書館本の図版を並べて配置した。



(吉田家本)

(a)

↑全く同じ↓



(玉川大学図書館本)

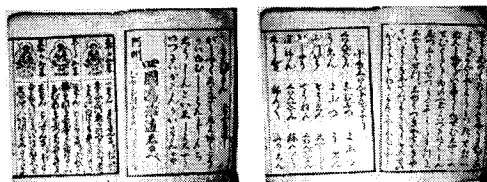
この間ページがない

吉田家本にある三人の遍路の挿絵 (a) のあとにある「しよしんこん」から「さんけもん」までの部分が玉川大学図書館本では全く欠けている。念のため同版、異版関係を確認しておきたい。

← 吉田家本



← 玉川大学図書館本



(aと同じ)



(b)



(b)

上下とも最初の見開きは同版であるが、次の見開きは(b)上下異版である。玉川大学図書館本では、一番霊山寺からの札所案内は改刻されている。

次に奥付(c)を検討する。奥付は吉田本では、書店の広告「四国へんろ道しるべ」「同細見大の図折本」「同細見小の図折本」があつて、その後刊行年「文化甲戌年九月」と本屋「大坂書林 心斎橋南へ五丁目 佐々井治郎右衛門版」とある。

吉田本奥付



(c)

玉川大学図書館本奥付



(c)

ところが、玉川大学図書館本では、吉田本にあった三点の宣伝の後に次の記載がある。

取次所 阿州徳島新町一丁目 天満屋武兵衛	阿 売払所 第二番三ばんの間 川ばた村	州 天神の松より半丁北 桑原氏	かつけふみいたため おづれまめうちきづきりきづ ちとめでものはれもの二きめうになをるかう やく有 四国へん路の御かたへほどこし申候 たんせきのミやう薬うりひろめ申候
----------------------	---------------------	-----------------	---

この本は、取次所が徳島の
新町一丁目の天満屋武
兵衛、売払所は一番札所
と二番札所の間川ばた村
の桑原氏と設定されてい
る。この事から本書は地
元での販売用に作成され
たものと思われる。
そして遍路への施しと
して「脚気、踏み痛め、
おづれまめ、打ち傷、切
り傷、血止め、出物腫れ
物に奇妙に効く膏薬」、
売り物として「痰咳の妙

薬の販売」の広告が載せられている。

以上の奥付の検討によつて、吉田本は中央版、玉川大学図書館本は四
国現地での売り本と見ることが出来る。そして、玉川大学図書館本では、
「しよしんごん」や「はんになしんぎよう」などが採録されていないこ
とから、現地では何が求められ、何が採用されなかったかを示すものと思
われる。

ここで本屋佐々井の矛盾も指摘しておきたい。佐々木は文化十一(一
八一四)年に『四国編路御詠歌道中記 全』(吉田家本)を刊行し、仏
前勤行に「般若心経」など多くのお経を含む新スタイルを提案しなが
ら、他方では『四国偏礼道案内』(玉川大学図書館本)では仏前勤行に

「般若心経」などのお経を採用しないものを出版している。後者が当時通用のスタイルであろうか。購買者の意向に押された格好か。

次に佐々井は、『四国徧礼道指南増補大成』（文化十二（一八一五）年）を刊行した書店でもあったが、この本は仏前勤行に「般若心経」などのお経を採用していない。ここでも当時の購買者の意向に押されたのであろうか。

結局佐々井は、『四国徧路御詠歌道中記 全』で新しい納経スタイルを打ち出しつつも、それを継続しては刊行できなかったのである。おそらく当時の購買者である徧路に支持されなかったのではないだろうか？

四 近代の作法

1 明治初年の宗教統制と徧路対策

慶応四（一八六八）年神仏分離令が發布され、札所がすべて寺院となる（一宮の排除）、札所寺院が廃寺になる例もあった。また寺院の衰退―寺領の減少（上知―御上へ返納）もおこった。

明治四（一八七一）年十月十四日巡礼の一つ六十六部が禁止され、翌明治五年十一月九日には「自今僧侶托鉢之儀禁止候事」と僧侶の托鉢行為が禁止された。「修行」と呼ぶ托鉢と同種の行為・門付けをしていた徧路には大きな打撃となった。

政府は「乞食物賞」を無籍の者、浮浪者と見なしてその取り締まりを府県に行わせた。愛媛県では、徧路統制の布達が明治五く七年の間に七件出されているが、その最後の、明治七年の布達で、「乞食物賞」は①見当り次第来路へ追い払うこと②米銭食物等を与えた者は、その者を引受て原籍へ送り帰すこと、また無籍の者は永くその家の戸籍に加えること、これを心得違いのない様に区内に通達せよ、と命じていた^⑥。巡礼は

危機を迎えたのであった。

2 近代（明治く昭和・戦前期）の作法―三つの流れ―

明治政府の神仏分離政策と浮浪者対策のもとで、四国徧路のあり方にも模索の時代が続いた。特に托鉢をおこなう徧路を浮浪者と見なして取り締まりの対象とする政府・諸県の住民対策の中で、徧路の仏前勤行にも変化が出てきた。

明治時代以後の案内書を検討すると、仏前勤行の方式には三つの流れが検出出来る。

その第一の流れは真念以来の伝統的スタイルにさまざまお経や偈を追加し仏教色を強めるが、「般若心経」は採用していないというもの。明治維新から戦前（一九四五年）迄はこの第一の流れが案内書の主流であった。この流れに属するのは、①明治十六（一八八三）年『四国霊場略縁起道中大成』（中務茂兵衛著・発行）②明治四十四（一九一）年『四国霊場案内記』（三好広太著四国巡拝歓迎団発行）、③大正十五（一九二六）年『四国徧路同行二人』（三好広太著此村欽英堂発行）④昭和二（一九二七）『四国霊場礼賛』（武藤休山著松山向陽社発行）⑤昭和十四（一九三九）『昭和版・四国徧路同行二人』（安達忠一著此村欽英堂発行、昭和十四年再版）⑥昭和十五（一九四〇）年『四国八十八箇所お徧路案内』（編集発行人森広市高松観光協会発行）等であった。

これらの案内書での仏前勤行の構成を知るため仏前勤行一覧表1を作成した。

第二の流れはたとえば五体投地の採用を提案する等、仏教修行の強化の面を一層強調するもので、明治二十五（一八九二）年に刊行された『四国霊場記』が唯一のものであった。この仏前勤行の方式は遍路には採用されなかった。その構成を知るために仏前勤行一覧表2を作成した。

仏前勤行一覧1

発行年	案内書名	奉納文・祈念文	開経偈	懺悔文	三帰	三戒	十善戒	発菩提心真言	三摩耶戒真言	般若心経	諸真言	光明真言	大師宝号	大師和讃	回向文	御詠歌	大金刚輪陀羅尼	普礼	五体投地	祈願文	著者、編集、発行等
1883・明治16年	四国霊場略縁起道中大成					○	○					○	○	○	○						中務茂兵衛著・発行
1911・明治44年	四国霊場案内記	○		○		○	○	○	○			○		○	○	○					三好広太著（四国巡拝歡迎団発行）
1926・大正15年	四国遍路同行二人	○		○		○	○	○	○			○	○	○	○		○		○	○	三好広太著、此村欽英堂発行初版大正3年、大正15年22版
1927・昭和2年	四国霊場礼賛（四国巡拝案内記）	○		○		○	○	○	○			○	○	○	○	○				○	武蔵休山？、著作兼発行人武蔵恵真・発行所松山向陽社
1939・昭和14年	昭和版・四国遍路同行二人	○		○		○	○	○	○			○	○	○	○	○			○	○	安達忠一著、此村欽英堂発行、昭和14年再版
1940・昭和15年	四国八十八箇所お遍路案内	○		○		○	○	○	○			○	○	○	○	○			○	○	編集発行人森広市、発行高松観光協会
(参考)現代	四国遍路－作法と御経の意味		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						百万人にお遍路を伝える会

仏前勤行一覧2

年	案内書名	開經偈	懺悔文	三歸	三戒	十善戒	菩提心真言	三摩耶戒真言	般若心經	諸真言	光明真言	大師宝号	大師和讃	回向文	大金刚輪陀羅尼	普礼	五体投地	著者、編集、発行等
1892・明治25	四国霊場記		○	○	○	○	○	○			○	○ (高師法号)	○	○	○	○	○	筆者・住田大 ?(権中僧都、自性院住職)
(参考)現代	四国遍路－作法と御経の意味	○	○	○	○	○	○	○	○	○ (十三仏真言)	○	○		○				百万人にお遍路を伝える会

仏前勤行一覧3（般若心経導入）

年	案内書名	奉納文・祈念文	開経偈	懺悔文	三帰	三戒	十善戒	発菩提心真言	三摩耶戒真言	般若心経	諸真言	光明真言	大師宝号	大師和讃	回向文	御詠歌	舍利礼	十句観音経	著者、編集、発行等
1880・明治13	四国八十八ヶ所道中独案内（四国?礼道案内）	○		○						○	○（十三仏真言）	○	○			○		○	編集・出版松本善助（大阪）
1902・明治35	四国八十八ヶ所御詠歌四国道中記（四国?礼道案内）	○		○						○	○	○	○			○		○	著作発行・伊沢駒吉（大阪）
1931・昭和6	四国遍路のすゝめ	○（祈念文）	○	○	○	○	○	○	○	○	○（十三仏真言）	○	○		○	○	○	○	安田寛明著発行所中野大師堂
(参考)現代	四国遍路－作法と御経の意味		○	○	○	○	○	○	○	○	○（十三仏真言）	○	○		○				百万人にお遍路を伝える会

第三の流れは仏前勤行の核に「般若心経」を採用したスタイルを提起するもので、江戸時代の文化十一（一八一四）年の『四国編路詠歌道中記全』（吉田家本）に端を発する流れであった。この流れに属する案内書が明治十三（一八八〇）年四月、さらには明治三十五（一九〇二）年に刊行されたが、共に文化十一年の『四国編路御詠歌道中記』と全く同じ仏前勤行の提案であった。しかし、この仏前勤行の提案は明治の2回共に定着しなかった。

このようにこの第三の流れは、明治大正時代には遍路からのあまり大きな支持は無かったようだが、昭和になると注目すべき案内書が出版された。それは、安田寛明『四国遍路のすゝめ』で、同書は「四国出立の用意から帰るまで」「四国巡拝の道順について」並びに「道中の心得」の項を設け、合計百六十三項に及ぶ注意や心得などを記し、これから遍路に出ようとする人たちの疑問・要望に丁寧にくたえる面を持ち、遍路入門書としてかなり影響を与えたのではないかと推察される（仏前勤行一覽3参照）。

こうして近代においては第一の流れと第三の流れが併存していた。

（4）戦後の作法

戦後では昭和三十九（一九六四）年刊の西端さかえ著『四国八十八札所遍路記』が最初の案内書のように、それまでは案内書の刊行が見当たらない。

西端は一九五八年に遍路をし、その体験をもとに『四国八十八札所遍路記』をまとめたのであった。本書は非常によく配慮された案内書兼体験記で、戦後初期の仏前勤行を知る上でも参考となる書である。本書には当時四国で行われていた拝み方（Ⅱ「仏前勤行」）の「きまり文句」が記録されている。それは、

真言（三通となえて、三遍礼拝）おんさらば たたぎやた はなま

んのうきやろみ

祈願文・懺悔文・三帰文・三竟・十善戒・三摩耶戒真言・摩訶般若波羅密多心経・十三仏真言・光明真言・大師宝号・誓願・ご詠歌・回向文

というものであった。ここには般若心経が含まれており、第三の流れが拝み方のきまり文句という形で定着していたと見られる。しかしあらたに「真言」が加わる等、尚変化をしていたようだ。おそらくこの時期に近い時期に、現代の仏前勤行が出てくるものと思われる。

おわりに

仏前勤行・作法の変遷は、江戸時代には二つの流れがあった。

その一は、真念以来の伝統的スタイル。「紙札打ちやう」（奉納文）に示された方式で、ご詠歌を中心としていた。その二は江戸時代後期（文化年間）に『四国編路御詠歌道中記 全』が出版され、「般若心経」を仏前勤行の中核にすえるやり方が出てきた。こうして江戸時代後期には二つの流れが生まれた。

一方近代では三つの流れがあった。

第一の流れは真念以来の伝統的スタイルを継承し、仏前勤行に「般若心経」を採用しないスタイル―御詠歌中心であるが、そこに各種のお経が追加されたスタイル。これが戦前までの主要なスタイルであった。

第二の流れ―仏教修行の面（五体投地等）を一層強調するスタイル。提起のみで実施されたどうかは不明。

第三の流れ―仏前勤行の核に「般若心経」を採用したスタイル。

般若心経を含む勤行は一八一四年に登場。一八八〇年、一九〇二年にも登場したが普及はしなかったようだ。この流れでは昭和六年の安田の『四国遍路のすゝめ』が戦後を含めて大きな影響を与えたと推定される。

が、その実相・実態の解明は今後である。

最後に今回の結論は、今日の仏前勤行は戦後に確定する、ということである。

註① 内田九州男「四国遍路と作法の変遷」二〇〇五年十一月五・六日

「四国遍路と世界の巡礼―アジアの巡礼―」公開シンポジウム・研究集会（於愛媛大学）での報告。

② 内田九州男「四国遍路と作法の変遷」（『「四国遍路と世界の巡礼―アジアの巡礼―」公開シンポジウム・プロシーディングズ』、同実行委員会編集、二〇〇六年二月二〇日発行）

③ 岩波書店刊。

④ 愛媛大学法文学部日本史研究室蔵本を利用した。

⑤ 愛媛県歴史文化博物館蔵本を利用した。

⑥ 註⑤に同じ。

⑦ 愛媛大学法文学部日本史研究室蔵本を利用した。全文の図版と読みは『資料紹介・『奉納四国中辺路之日記』』（「四国遍路と世界の巡礼」プロジェクト編集・発行、平成二〇年三月三十一日発行）を参照されたい。

⑧ 愛媛大学法文学部日本史研究室保管。

⑨ 『愛媛県史資料編 近代Ⅰ』（昭和五十八年一月（愛媛県発行））

⑩ 著作発行者・安田寛明、昭和六年四月二十一日、中野大師堂発行。同書の復刻版が平成十二年四月十九日に安田一雄氏によって発行されている。

⑪ 昭和三十九年九月一日刊、大法輪閣発行。

（参考）（経）

① 開経偈 無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇 我今見聞得受持 願解如来真实義

② 懺悔文 我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡 從身語意之所生 一切我今皆懺悔

③ 三帰 弟子某甲 尽未来際 帰依仏 帰依法 帰依僧

④ 三竟 弟子某甲 尽未来際 帰依仏竟 帰依法竟 帰依僧竟

⑤ 十善戒 弟子某甲 尽未来際 不殺生 不偷盜 不邪姪 不妄語 不綺語 不惡口 不兩舌 不慳貪 不瞋恚 不邪見

⑥ 發菩提心真言 おんぼうじしつたばだはだやみ

⑦ 三昧耶戒真言 おんさんまやさとぼん

⑧ 仏説摩訶般若波羅蜜多心經 （唐三藏法師玄奘訳）

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行

識亦復如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減 是

故空中無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界

乃至無意識界 無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集

滅道 無智亦無得 以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣

礙無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般

若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐 三菩提 故知般若波羅蜜多 是大神咒

是大明咒 是無上咒 是無等等咒 能除一切苦 真實不虛 故說般若

波羅蜜多咒 即說咒曰 羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提僧莎訶

般若波羅蜜多心經

（出典 金岡秀友校注『般若心經』講談社学術文庫）

⑨ 十三仏真言

⑩ 不動明王 のうまくさんまんだばざらだんせんだ

⑨ 2 釈迦如来

まかろしやだそわたやうんたらたかんまんのうまくさんまんだぼだなんぼく

⑨ 3 文珠菩薩

おんあらはしやのう

⑨ 4 普賢菩薩

おんさんまやさとぼん

⑨ 5 地藏菩薩

おんかかかびさんまえいそわか

⑨ 6 弥勒菩薩

おんまいたれいやそわか

⑨ 7 薬師如来

おんころころせんだりまとうぎそわか

⑨ 8 観世音菩薩

おんあろりきやそわか

⑨ 9 勢至菩薩

おんさんざんさくそわか

⑨ 10 阿弥陀如来

おんあみりたていせいからうん

⑨ 11 阿しゆく如来

おんあきしゆびやうん

⑨ 12 大日如来

おんあびらうんけんばざらだとぼん

⑨ 13 虚空蔵菩薩

のうぼうあきやしやきやらばや おんありきや

⑩ 光明真言

まりぼりそわか
おんあぼきや・べいろしやのう・まかばだら・

まにはんどま・じんばら・はらばりたやうん

(意識「帰命・効験空しからざる遍照の大印、すなわち、大日如来等をして菩提心にてんかせしめよ。」) (「一文の意義は、大日如来に対する祈願であり、功德としては、この真言を三回、七回、二一回受持誦する者は生死の重罪を滅し、宿業病障を除き、智慧弁才福楽長寿を得るとさ」れる。)

(出典徳山暉純『梵字手帖』木耳社刊)

⑪ 大師宝号 南無大師遍照金剛

⑫ 廻向 願わくは、この功德を以って、あまねく一切に及ぼし 我らと

衆生と皆ともに、仏道を成ぜん

(以上、出典『四国遍路 作法とお経の意味』)

⑬ 延命十句観音経 観世音 南無仏 與仏有因 與仏有縁 法僧縁

常樂我浄 朝念観世音 暮念観世音 念念從心起 念念

不離心 (出典 大阪中之島図書館蔵『西国順礼略打大全』)

⑭ 「大金刚輪陀羅尼 なうまく しつちりや ちびきや

なん さらば たたぎやたなん

あん びらじ びらじ まかし

きやら ばじり さたさた

さらてい さらてい たらい

たらい びだまにさんばんじやに

たらまちしつた ぎりやたらん

そわか

(出典『十三佛真言般若心経』)

⑮ 普礼 (ふらい) (普礼真言)

おん さらば たたぎやた はんなまんのう きやろみ

(出典『四国霊場記全』)

祈願文

種々重罪 五逆消滅

自他平等 即身成仏

頌文

若人求仏恵 通達菩提心

父母所生身 速証大覺位

舍利礼

一身頂礼 万徳円満 釈迦如来
真身舍利 本地法身 法界塔婆
我当礼敬 以我現身 入我々入
仏加持故 我証菩提 以仏神力
利益衆生 発菩提心 修菩薩行
同入円寂 平等大智 今將頂礼

祈念文

納め奉る此所の御本尊 大師 太神宮 鎮守 総じて
日本大小の神祇 天子 皇后 文武百官 父母 師長 六親 眷属
乃至法界平等利益

(明治四十四年『四国霊場案内記』・昭和十五年『四国八十八箇所お遍路案内』)